

## 祝福を与える人生 創世記 47:1-12

2024. 9. 15、丘の上 NO. 733

春日部福音自由教会 山田豊

本日の説教題のヒントは、7節、10節からです。新改訳聖書第3版で「あいさつした」というところが、「祝福した」と言葉が変わっていたのです。聖書協会訳の10節は、「ヤコブは祝福の言葉を述べて挨拶し、ファラオの前から退出した」となっています。こちら方がすっきりとした訳になっていると、感じます。

しかしながら、ヤコブが自分よりも若いエジプト王を祝福したというのは、驚きの場面です。アブラハム、イサク、そしてヤコブと続くイスラエルの族長の一人であるヤコブは、他の族長とは違う波乱万丈の生涯、ハチャメチャな人生を送った人ではないかと思えます。

彼はイサクの妻リベカから生まれましたが、双子の兄のかかとを掴んで生まれ落ちたところから、ヤコブ(かかと)と名付けられました。この言葉は、嘘つき、押しのける者、という意味もあるそうです。こんな名前を付けられたことに同情しますが、まさにそのような人間として大きくなりました。一杯の食物と引き換えに兄の長子の権利を奪い、父を欺いてイサクから長男の祝福を受けました(創世記 25, 27)。このようなことをした弟ヤコブを殺そうとした兄エサウの元を離れ、親戚筋のラバンの元で暮らし、彼の娘二人と結婚します。二人の間だけでなく、それぞれに仕える召使女との間にも子供をもうけ、子供や財産に恵まれます(創世記 28-31)。しかし、下から二番目のヨセフは獣に殺されたという知らせを受けて、ひどく落ち込み、一緒に死んだほうが良かったというほどでした(創世記 37)。しかし、彼はエジプトの王に仕えるものとして生きており、ヤコブたち家族を呼び、ゴシェンのちに住まわせて、彼の老後の面倒を見たのです。のちにヤコブは、孫や子供たちを祝福して人生を終えました(創世記 45-50)。

ヤコブは兄エサウと和解する前に、神の臨在を知り、ヤボクの渡しでは、神に心を砕かれる経験をします。そのような時でも、ヤコブは神の祝福を求め続けていました。ヤコブと格闘したみ使いに、こう言うのです。

「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」

祝福を自分のものにしたという性質というか気質は変わりませんでした。しかし晩年には、彼が得た祝福を自分のところでとどめるのではなく、他の人に分かち合う者へと変えられていくのでした。

明日は敬老の日です。若い者、これからの時代を担う人を祝福することは、今日まで生かされた者の、大切な使命なのです。

引用聖句

創世記 28:26-18 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

創世記 32:24-28 ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。25 その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた 26 すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」27 その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は言った。「ヤコブです。」28 その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」